薬王院東遺跡の調査成果と新指定文化財について

～弥生と古墳のはざまの中で～

新垣　清貴

【薬王院東遺跡第６地点第２次調査概要】

所 在 地　水戸市元吉田町 573-１

調査原因　集合住宅建設

調査期間　平成 30 年１月４日～20 日

調査面積　約 142 ㎡

調査主体　水戸市教育委員会（担当：新垣　清貴）

調査支援　株式会社日本窯業史研究所（担当:水野　順敏）

１　遺跡の概要

薬王院東遺跡は，栃木県那須連山を水源とする水戸市内の北域を流れる那珂川によって開析され形成された那珂台地に立地する。那珂台地は細かく俯瞰すると那珂川や桜川の開析から千波湖を望む台地にあたる。桜川や逆川などの開析による樹枝状の支谷が複雑に入り組む台地縁辺である。本発表のテーマである薬王院東遺跡はこのような，那珂台地を中心に縄文時代から近世と各時代の遺跡が数多く営まれた背景はこのような地勢と決して無縁ではあるまい。

薬王院東遺跡は，式内の古社である吉田神社の西側から進入して南下する支谷の先端部に相当し，ここの狭長な谷を挟み南北に広がる。

歴史的な環境では本遺跡の周辺は縄文時代中期の貝塚である吉田貝塚，縄文時代中期の集落から近世の集落がいくつも点在する。薬王院東遺跡の主体をなす弥生時代から古墳時代にかけての遺構が多いが，千波湖を望む台地縁辺一帯に広がることは注目される。

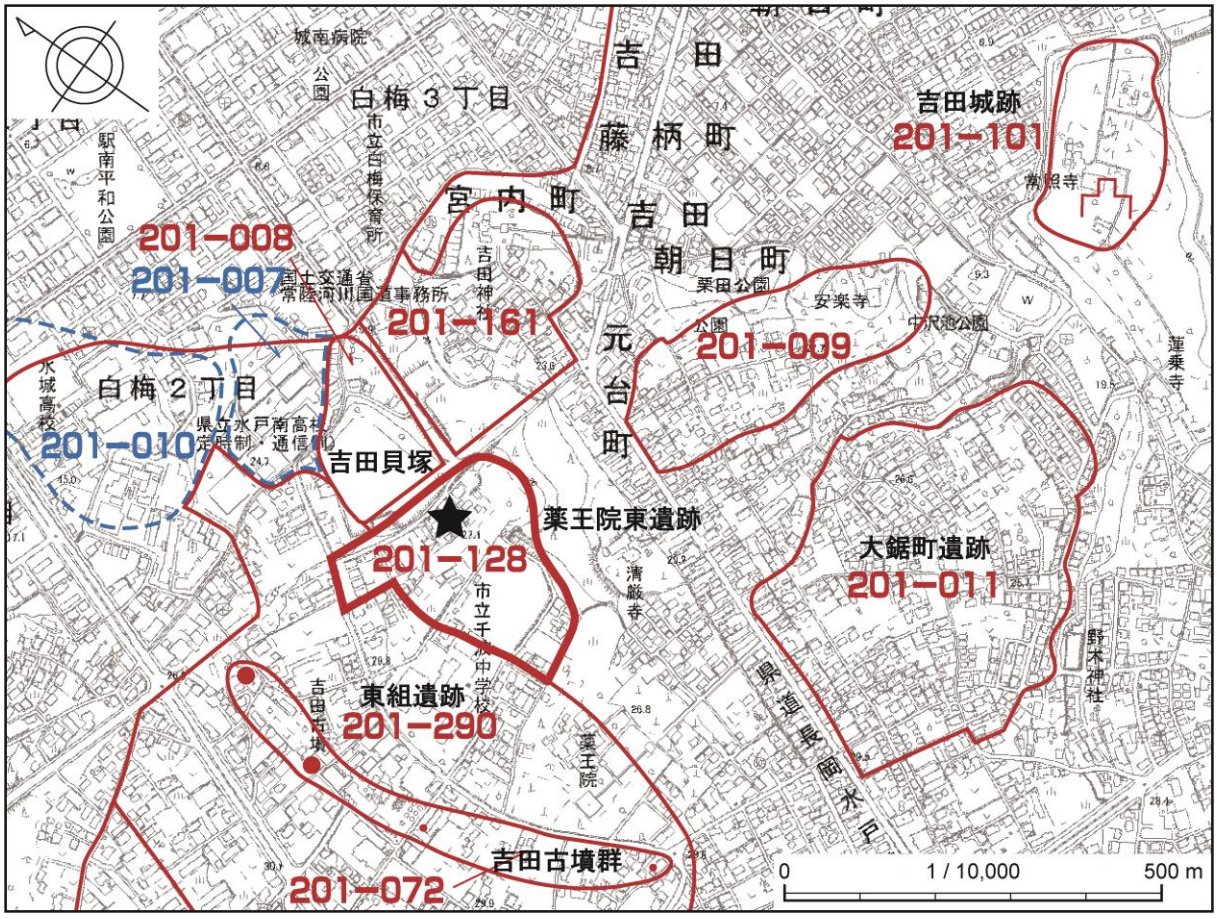
薬王院東遺跡より同じ台地の南東では弥生時代から近世にかけての長期に亘る大鋸町遺跡が広い範囲にて確認されている。

薬王院東遺跡は平成元年に第１次調査が行われており，今回が２次にあたる。第１次調査は千波中学校の建設に伴い発掘調査が実施され，縄文時代の竪穴状遺構が１基，弥生時代の竪穴建物跡 10 軒，同じく竪穴状遺構１基，古代の竪穴建物跡 38 軒，同じく古代の工房とみられる遺構１基，粘土採掘坑１基，古代から中世とみられる井戸跡３基，時期不明の溝状遺構２条が確認されている。弥生時代の遺構はいずれも弥生後期十王台式で集落内での土地利用が最も活発化する段階が古代８世紀から９世紀にかけてであった。

今回，発掘調査が行われた薬王院東遺跡第６地点は集合住宅建設に先立ち実施された試掘・確認調査によってその所在が確認された遺構を対象に平成 30 年１月４日から平成 30 年１月 20 日にかけて調査が実施された。

２　薬王院東遺跡第６地点の調査成果

今回の調査で確認された遺構は弥生時代から古墳時代前期の竪穴建物跡２軒，中世の土坑１基，小穴１基，時代不明の土坑８基，ピット 25 基が確認された。ここではそのうち竪穴建物２軒，土坑１基について詳しく触れておきたい。



第１図　薬王院東遺跡と周辺遺跡（★の位置が第６地点・千波中学校が第１地点）

１号竪穴建物跡（SI-1）

調査区中央のやや東寄りで検出された。各所に後世のカクランがみられ遺存状況が良好でない。平面形・規模は北東・南西長さ約 4.2m，北西・南東長さ４ｍのほぼ方形であり，主軸方位は N-34°-E である。住居の壁は現存高で 20～35cm，北西辺，南西辺はやや外傾するがその他は垂直ぎみである。壁下に壁溝は確認されず床面はローム層を利用し，ほぼ平坦で堅く締まる。主柱穴とみられるピットは確認されない。南隅の P-1 と東隅の P-2 は貯蔵穴と考えられる。P-1 は 80×90cm の不整楕円形で深さ 20cm，覆土中から土師器片５点が出土した。P-2 は 43×45cm の円形で，深さ 21cm。同じく覆土中から土師器片 16 点が出土した。炉跡は２ヶ所確認された。南北長 50cm，東西 30cm の範囲で厚さ５cm～20cm の被熱痕跡がみられた。

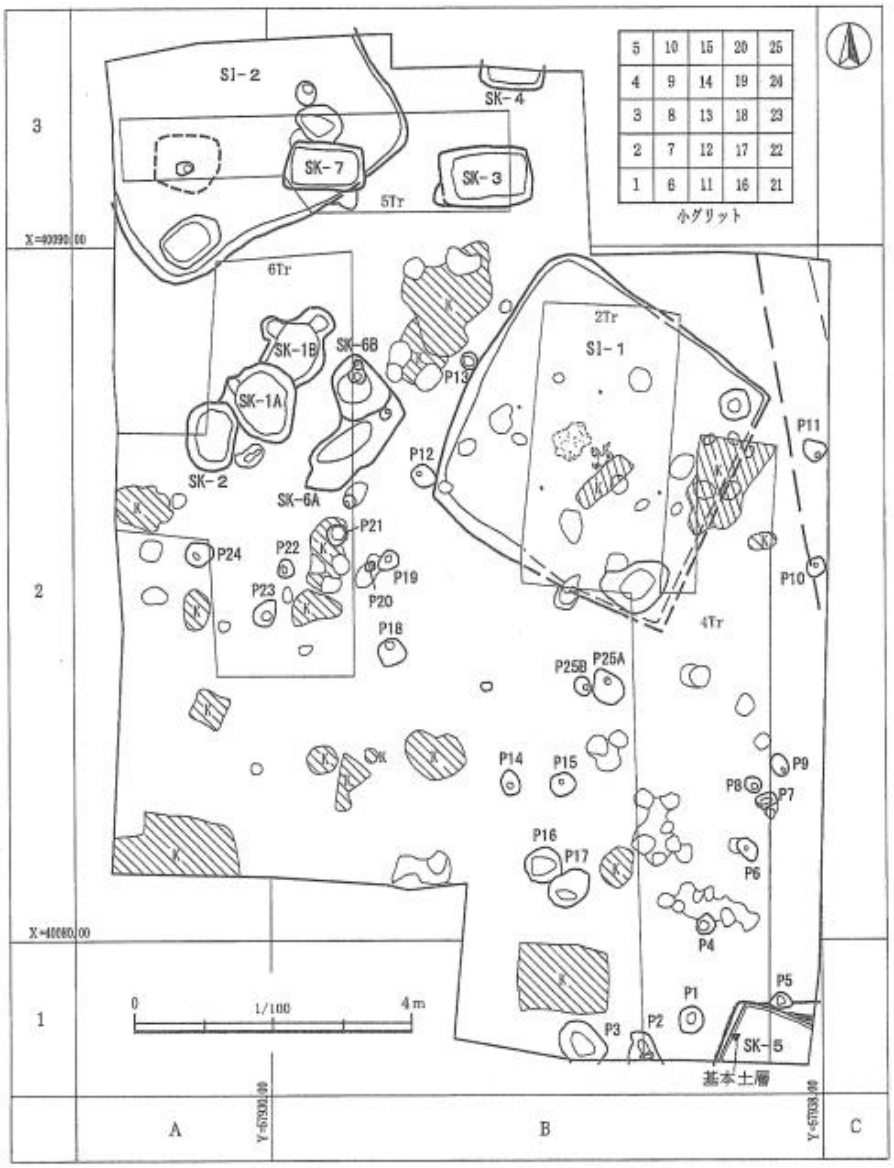
出土遺物は縄文土器，弥生土器，土師器，須恵器など総計 129 点が出土。遺構の帰属年代については，古墳時代前期初葉と考えられる。

２号竪穴建物跡（SI-2）

調査区北西隅で検出された。北半分は調査区外となる。SK-7・８によって切られる。平面

形や規模は明確にし難く,北東・南西長約 4.35m,現存北西・南東約 3.33m を測る。本来は一辺 4.35m ほどの方形と考えられる。南東辺より推定される主軸方位は N-31° -W を示す。壁は 25cm から 30cm である。壁下に壁溝は確認されなかった。床面は平坦で堅く締まる。ピットは主柱穴が２基。貯蔵穴が１基確認された。貯蔵穴の規模は 60cm×90cm で深さ 20cm 程度である。炉跡は確認されない。

出土遺物は縄文土器,弥生土器,土師器,須恵器など総計 147 点である。遺構の帰属年代については,古墳時代前期初葉と考えられる。

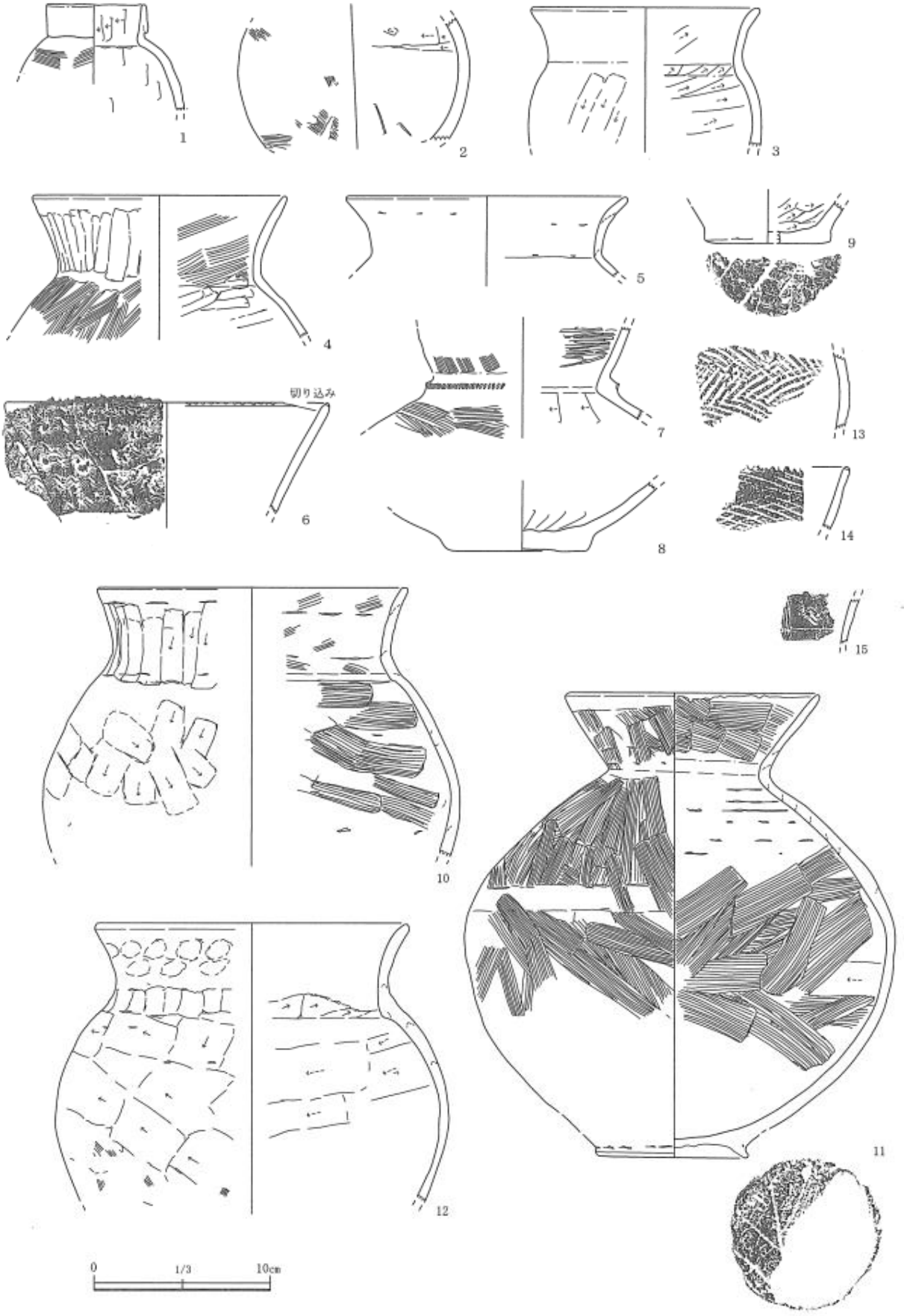


第２図　薬王院東遺跡第６地点　調査区全体図

５号土坑（SK-5）

調査区南東隅に位置する。北西隅の一部を確認したのみで,他の大部分は調査区外にあたると思われる。

平面形や規模は明確にし難く,現存長東西長約 110cm,現存南北長約 95cm,本来は方形もしくは長方形の比較的大型の遺構と推測される。深さ 85cm～105cm で,壁は直立する。底面は,



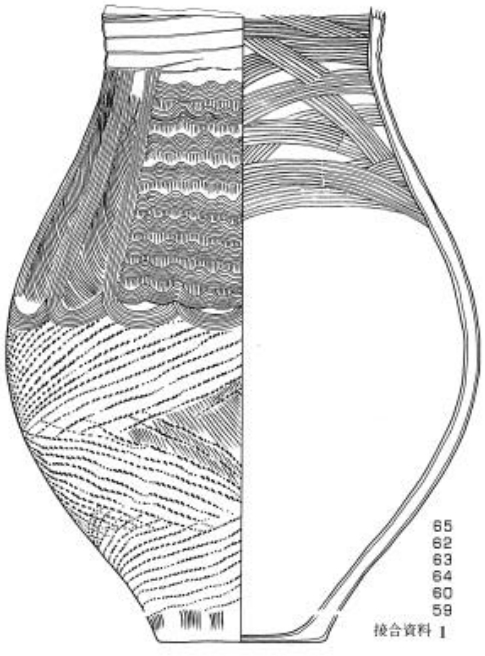
第３図　第６地点　２号竪穴建物跡出土遺物（※６は十王台式と古墳時代土師器甕の折衷）

新旧２面が確認された。旧面は約 15cm 深く掘り下げた後，ローム土で整地しその上面を使用面とする。ほぼ平坦で堅く締まる。その後，厚さ１～1.5cm 程度の黒褐色土の間層の上にローム土主体の土で厚さ１cm～1.5cm の貼床を設ける。同面から直上で古瀬戸の瓶子，折縁深皿，壺などが出土した。出土遺物は，縄文時代の石皿，古墳時代の埴輪，古代の土師器，須恵器の他，14 世紀末から 15 世紀初めにかけての陶器である。遺構の帰属年代については，上記遺物の年代から 14 世紀後半から 15 世紀初め頃と考えられる。

３　薬王院東遺跡第６地点調査成果からみる新指定文化財の評価

薬王院東遺跡の調査では検出された竪穴建物跡２軒はいずれも出土遺物から古墳時代前期初葉という年代が与えられる。なかでも興味深い１例は，２号竪穴建物出土土師器片（第３図-６）の弥生後期の様相を残した古墳時代土師器甕である。

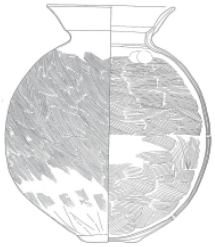
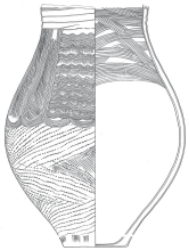
特徴として弥生時代の器形に古墳時代土師器の調整法を残すものとみられる（第 3 図-6)。薬王院東遺跡周辺を例にしてみれば，平成 63 年に発掘調査が行われた大鋸町遺跡第 36 号竪穴建物跡，第 41 号竪穴建物跡出土に「大鋸町式」として井上義安によって提唱されてきたものがみられる。これらは器形こそ弥生時代後期の十王台式そのものであるが，文様構成のうち地文要素として古墳時代前期の刷毛目調整を持つ極めて特異な土器である（第 4 図)。さらに大塚町周辺の大塚新地遺跡第２号竪穴建物跡でも器形が弥生時代の壺形を呈し，調整がほぼ無文。底部付近に大鋸町遺跡同様，刷毛目調整を施すもの（第６図-左端写真）がみられる。弥生時代から古墳時代へと西日本からの移りは，この時期，東海，北陸地方から一斉に県内各地に波及し，弥生時代は終焉を迎え古墳時代へと移行していったものとみられる。今回の土器群はいずれもその移行期の姿をよく示している資料として高く評価できるものである。特に水戸台地を中心として広く分布する折衷土器群として位置づけが可能であり，今後も水戸市の指定文化財として長く保存し，活用を図るべき資料である。このような歴史的な重要性が評価され平成 30 年１月，水戸市の新指定文化財として指定された。



第４図　大鋸町式土器

第５図 大鋸町式にみられる刷毛目調整

第 6 図　弥生と古墳の折衷土器（左：大鋸町遺跡出土・中央：大塚新地遺跡出土・左：大鋸町遺跡出土）

		時代・時期	形の特徴	焼き方・色調	文様の特徴	器面調整の特徴
弥生土器の壺	十王台式土器	（3世紀後半）弥生時代後期	**胴が長く**頸の部分から注ぎ口の部分までは土師器に比べて長く、直線的に開く。	**野焼き**を採用。全体が空気に触れて**酸化するため、赤くなる**。	弥生土器の特徴である付加条縄文、櫛描文、縦スリット文、波状文が描かれる。	特にない。
土師器の壺		（4世紀）古墳時代前期	**胴が丸く**、頸の部分から注ぎ口の部分までは短くて直線的に開く。	**覆い焼き**を採用。酸化焔焼成により**赤くなる部分と黒く炭素が吸着した部分**とがある。	**文様はない**。	土師器の特徴である**刷毛目が器面**に施される。
折衷土器の壺	 大鋸町遺跡		**弥生土器の特徴である胴長で**頸の部分から注ぎ口の部分までは土師器に比べて長く、直線的に開く。	**覆い焼き**を採用。酸化焔焼成により**赤くなる部分と黒く炭素が吸着した部分**とがある。	弥生土器の特徴である付加条縄文、櫛描文、縦スリット文、波状文が土師器の特徴である**刷毛目の上から**描かれる。	土師器の特徴である**刷毛目が器面**に施される。
折衷土器の壺	大塚新地遺跡		**弥生土器の特徴である胴長で**頸の部分から注ぎ口の部分までは土師器に比べて長く、直線的に開く。	**覆い焼き**を採用。酸化焔焼成により**赤くなる部分と黒く炭素が吸着した部分**とがある。	**文様はない**。	土師器の特徴である**刷毛目が器面**に施され、土師器に特徴的にみられる輪積みの痕跡が顕著に残る。

第 7 図　弥生土器，土師器と両方の特徴を合わせ持つ折衷土器の特徴と違い

４　まとめ

薬王院東遺跡は今回が２回目の本発掘調査となる。試掘・確認調査と合わせれば６地点を数える。調査面積こそ 142 ㎡という小規模な面積ながらも,調査を通して得られた情報は非常に有益なものであり,弥生時代から古墳時代の竪穴建物,古墳時代の埴輪片,中世などの多くの遺構や遺物が検出された。埴輪片は周辺に未周知の古墳の存在が伺え,また中世の土坑出土の古瀬戸陶器は 14 世紀後半から 15 世紀前半という年代観が示され,周辺における薬王院や吉田神社の関係を強く示すものと考えられる。次に第２号竪穴建物跡出土の弥生と古墳の折衷の土器片は新指定文化財の評価をより一層色濃くするものである。

弥生時代の終末から古墳時代への移り変わりを示す様相は多種多様な傾向をみせ,斉一的な変化のもと１本の線で引くことは難しい。いつの時代も生活の変化や社会,文化は個々の人々や地域の実情に即し作用するからこそ,線引きはよりいっそう難しい。

そのなかでも土器は粘土という加除修正が可能なものを素材にしている以上,製作者は一つのキャンバスに思い描く作品を作ることが可能なのである。本来,土器に二つと同じ物は存在しない。

しかし製作者もそれぞれの出自を持ち,ひいてはある一定の集団の中に属し生活するうえで,無意識のうちにも何らかの社会的制約を受け生活している。土器が地域間によって異なる姿,共通した雰囲気を見せるのはそのためである。物質と形に言い換えればそれは過去も現在もこれからも変わらないであろう。

こうした集団的社会背景をもとに,各時代の土器は作られてきた。

３世紀後半から４世紀初頭という時代は,ちょうど弥生時代から古墳時代へのはざまである。この間にも人々の営みが消える訳でないし,弥生時代が終焉を迎えようとした前夜に,水戸台地に広がる十王台式文化圏にも,弥生土器製作のイメージに新たな古墳時代的な土器の波及が芽生え,折衷土器が生み出されていた。

薬王院東遺跡や大鋸町遺跡,大塚新地遺跡出土を中心とした折衷的様相の土器群からみえること,それがちょうど弥生時代から古墳時代への激動のなかで,新しい時代を受容する姿勢と,過ぎ去る時代の過去の記憶というキャンバスの上での葛藤なのかもしれない。この二つの時代の表現や記憶を,折衷（大鋸町式土器）という土器を通して,今,私たちは弥生と古墳のはざまをみることができる。

【引用・参考文献】

・茨城県教育財団編　1981「大塚新地遺跡」『常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』財団法人茨城県教育財団

・水戸市大鋸町遺跡発掘調査会編 1988『水戸市大鋸町遺跡』

・水戸市薬王院東遺跡発掘調査会編 1991『薬王院東遺跡』

・白石真理 1998　「常陸における土器群の隔期と交流」『庄内式土器研究ⅩⅦ-庄内式平行期の土器生産とその動き-』庄内式土器研究会

・水戸市教育委員会編　2018　『薬王院東遺跡第６地点-共同住宅建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』印刷中